

色彩効果を利用したダイニングテーブル

Dining Table using Color Effect

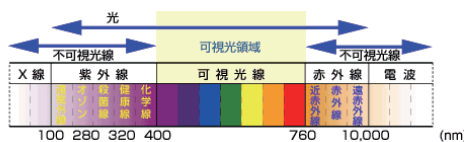
AD06 伊藤 敬太
指導教員 小西 均

1. 研究目的

様々な色彩に囲まれている私達は色そのものや色の組み合わせによって心理的な影響を受けている。そして、様々な生活シーンで色彩効果が利用されている事に重要性を改めて感じた。そこで、色の持つ効果や影響を研究し日常生活の向上を目的とした、オリジナルカラーのコーディネート进行研究目的にする。

2. 調査と分析

- ・色彩学調査 なぜ色を識別できるのか



上の図のように目で知覚できる光が可視スペクトルの範囲であり、この波長の長さによって色が識別される。

- ・色彩効果の調査

色が持つ色彩効果とその場面について調べた。書物によると、例えば赤は暖かく感じる、食欲増進、時間が早く感じるなどがありレストランで利用される。黄色は知育発達、社交的、注意を促し安全性を高めるために工場で利用される。

- ・色彩効果の分析

結果「食事」「作業」「心理面」の3つの場面で色彩効果が多く発揮されることが分かった。

3. コンセプトの立案

分析結果で3つの場面と関わりのある物として、日本の住居の食事に限定せず多目的に使用されるダイニングテーブルに着目し「ダイニングテーブル面での様々な用途に適したカラーコーディネート」をコンセプトにした。

4. デザイン展開

色の設定は部屋全体の調和よりも用途に合わせた色に重点を置いた。アンケートを行いテーブル面でどのような作業が具体的にあるか調査した。結果は「食事」では季節よっての食器を変え季節に合った食事をする。「作業」では読書、勉強、パソコンや細かい作業などを行う。「心理面」では食事をする際の会話が主である。これらの用途

から色の条件として食器の色を引き立て、作業で目に負荷のかからなくして、楽しく落ち着く色を制作する。

色の効果からリラックス効果、協調性と集中力を高めるため緑系統の色をベースにした。緑は可視スペクトルで真ん中の波長にあたり、目の網膜に最も負担のかからない色でもある。

食事の場では青色は食欲を減らす効果があるので、青みを減らし食欲増進の効果がある黄色や赤みを足し、目に優しい色にするために彩度、明度を下げ光の反射を抑えた。

最終結果としてマンセル値の1GY 6/4の色に選定してスタンダードなテーブルに塗装を行った。

5. 完成図



6. 結論

完成作品を実際に使用して意見を聞いてみた。食事では「お皿と料理が際立つ、落ち着く」と「少し暗い、オフィステーブルっぽい」と言う意見。作業では初めは「さみしく、冷たく感じたが本やパソコンを置くと色が邪魔をしなく、逆にこの暗さが良い、木目のテーブルよりも見やすい」と言う意見を得た。

改善点として感想意見から青みが強いと考察し黄や赤みを足し、明度を上げる必要性を感じた。

7. 参考文献

- 「色彩演出辞典」 学習研究社
- 「色立体」 日本色研事業株式会社
- 「色の心理効果」 京都塗料商業協力組合
- http://www/kyoto-paint.com/toolbox/color_shinri.htm